

## ふりかえりの視点をもとに、自分の「問い」をもちながら追求していく体育学習

— 6年「みんなでのびよう みんなでつくろう シンクロマット」の実践から —

### 1 単元のねらい

シンクロマットの作品づくりを通して、一つ一つの技ができるようになってきたり、友だちと話し合い、構成を工夫したりしながら、マット運動で表現することの楽しさが分かる。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

5年生のマット運動では、主にとび前転や倒立前転の学習やつなぎの技を生かしてオリジナル連続技づくりに取り組んだ。その連続技づくりでは「友だちの演技を見て、やっぱり足を伸ばすときれいだなと思いました。」というような単一の技についてのふりかえりを書く子もいたが、連続技発表会ではこのようなふりかえりを書く子もいた。

- ・今日は連続技発表会をしました。私は、少し技と技との間に時間が空いてしまったから、これから気を付けたいなと思いました。(後略) (児童A)
- ・今日は友だちと演技を見せ合って、それぞれのよいところを見付けました。それは、動きのリズムです。私は途中何をしたらよいか迷ったけど、○○さんと◇◇さんはリズムよくスムーズにしています。すごいなと思いました。(後略) (児童B)

児童Aは自分自身の演技を振り返り、児童Bは観察者の立場から思ったこととして、言葉は違いますがリズムや流れについて考えている。本題材「シンクロマット」では、友だちと演技を合わせながら、リズムよく次の技や展開に進むことが重要である。5年生のオリジナルの連続技づくりを通してのリズムや流れについての気付きを大切にしつつ、さらに本題材では「友だちと考え」「友だちと合わせながら」オリジナルのシンクロマットの作品づくりに取り組むことにより、マット運動の楽しさを広げてほしいと考えている。

#### (2) 本単元の内容と体育・保健体育科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

シンクロマットは、個人の技に加えて、チームによる表現型のマット運動である。マット運動というと、ある技が「できる」「できない」という単一の技の獲得にのみ偏る傾向がある。シンクロマットでは、全体のイメージをもつことで、目的をもった技の学習、習得が可能になると考える。また、シンクロマットの楽しさは、友だちと技のタイミングを合わせたり、意識的にズレをつくったり、進行方向を変えたりしながら、演技を構成するといった表現面にある。つまり、「友だちと合わせる楽しさ」「リズムに変化をつける楽しさ」「工夫しながら、つくりかえていく表現の楽しさ」がある。本単元では、頭の中で最初につくりあげた全体のイメージ（理想像）に近い作品を求めて、自分たちのできる技、できそうな技で構成し、一連の作品をつくりあげていくことになる。その中で自分たちのイメージに迫り、自分たちだけのオリジナルの作品をつくっていく過程において、一人一人の問いが生まれてくると考える。

シンクロマットの学習では、導入時に子どもたちがどのような全体のイメージをもつかが大切である。つまり、作品全体や自分たちがどのように動くよいかというゴールのイメージをもつことが大切である。ゴールのイメージを明確にするために、導入時に、最終時の発表会の採点基準を示していく。5年生の連続技づ

- 全体の流れ
  - ・演技と演技の流れはスムーズか。
- 演技の工夫
  - ・テーマが伝わる工夫があったか。
  - ・演技の組み合わせ方、場の構成、スピードや高さに工夫があるか。
- 一つ一つの運動の美しさ
  - ・技がていねいに行われているか。(補助つきOK)
- フレンドシップ
  - ・チームの仲間の息がっているか。
  - ・補助などの助け合いをしているか。

くりにおいてリズムや流れに意識が向いている子どもたちに右のような採点基準を示し、「スムーズな流れになっているか」「合わせるためにはどうすればよいか」「もっと分かりやすく伝えるためにはどんな工夫をすべきか」など、さらにレベルの高いチームの課題を意識できるようにすることにより、一人一人が自分の問いをもち、お互いに高めていく学び合いが可能になる。その中で、チームの仲間と共に追求しようとする姿が見られることと考える。

### (3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

本題材を通して、子どもたちは「友だちと合わせる楽しさ」「リズム変化の楽しさ」「つくりかえていく表現の楽しさ」を感じていくことになる。その中で、隊形や進行方向などの空間構成や友だちと揃えたりズレをつくったりする時間構成の学習をしていく。子どもたちは、オリジナルの作品づくりを目指し、問いをもち追求していく。具体的には、イメージをつくる段階の問い、一つ一つの技を高める段階での問い、チームで技を合わせる段階での問い、よりテーマが伝わるよう工夫する段階での問いが考えられる。子どもたちのもつ問いを確実にとらえ、学習場面でさらに掘り下げ、考えられるようはたらきかけていく。そのために、毎時間のふりかえりにおいて、次時につながるポイントについてふりかえりを行っていき、問いがつながるようにしていく。最終的には、チームでテーマに合う作品づくりを目指し、友だちと合わせながら、工夫して表現していく子どもたちの姿を期待する。

本題材では1チーム5名の6チームを構成し、2チームをペアにしてきょうだいチームをつくり、チームの学び合いや教え合いを大切にしていく。マットは方形マットを用いる。

第1次では、シンクロマットの作品のイメージづくりを大切にしたい。まずは、小学生や中高生などの映像を見てイメージをつかめるようにする。そして、自分たちが表現したいテーマに沿って、「はじめ」「なか」「おわり」のお話をつくり、作品の全体像をつかみ画用紙にまとめるよう提案する。その後、実際にマット上で動きながら変更していくことと考えられる。

第2次では、作品の中で行う技をお互いに高め合うことを目的として取り組む。具体的には、ペアシンクロに取り組みながら、チームの中でお互いの技を見合ったりアドバイスをし合ったりすることになる。友だちと技のタイミングを合わせることで、動きの中で身体制御する力も身に付くと考える。また、友だちと技を合わせる方法やポイントが分かってくることと考える。

第3次では、ペアシンクロの経験を生かしてチームとしての作品づくりに取り組む。その際に、指導者から対比の動きを提案したり、きょうだいチームで互いに演技の組み合わせ方や場の構成などのアドバイスをしたりしながら工夫してつくっていくことになる。

そして、第4次の発表会では4点の採点基準をもとにお互いに工夫しているところ、テーマがよく伝わったところなどを認め合い、まとめとする。

## 3 展開計画 (全8時間)

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	自分たちのシンクロマットのイメージをつかもう。	1 2	・シンクロマットの映像を見て、大まかなイメージをつかむ。 ・テーマからイメージを広げ、作品の内容を考える。
2	ペアシンクロを通して友だちと技を合わせながら、お互いに技を高め合おう。	3 4	・ペアシンクロを通して、作品に必要な技についてお互いに教え合ったり、補助し合ったりしながら学習する。 ・単一の技だけでなく、いくつかの連続技の中でそれぞれの技を高める。
3	お互いに意見を出し合い、チームの作品づくりに取り組もう。	5 6 7	・チームで技のタイミングや組み合わせなどを工夫したり、作品の内容を再度考えたりして、構成をつくりかえていく。 ・テーマがより伝わるように、対比の動きや演技の組み合わせ方、場の構成などについてアドバイスをし合う。
4	シンクロマット発表会をしよう。	8	・発表会を通して、採点基準をもとにお互いに工夫しているところを見付け、認め合う。

## 4 授業の実際

本実践は、問いをもち追求する姿として「願いをもっている」「粘り強く何度も練り直している」「試行錯誤している」姿を求めて実践した。子どもたち一人一人が問いや思いをもち、追求を続けるためには、各時間のめあてはもとより、そのめあてにつながる前時のふりかえりが重要と考えた。(そのふりかえりでは、思ったことや考えたことなど漠然としたふりかえりではなく、)本単元では各時間にふりかえりの視点を子どもたちに与え、問いや思いが連続し、追求が続いていくよう実践した。また、そのふりかえりをもとに、子どもの思いをとらえ、はたらきかけを行った。

### (1) シンクロマットの作品イメージをつくる

単元を通して問いや思いをもち続けるために、シンクロマットとの出会いを大切に取組んだ。第1時において、めあてを「シンクロマットのイメージをつくろう」と設定し、まずは小学生2、3年生のシンクロマットの作品と中学生、高校生の男子新体操部の演技の映像を紹介した。そして、映像を見た後、学級全体で目指すシンクロマットの作品の採点基準を提案した。どちらも、自分たちのゴールのイメージをもてるようにすることで、単元全体の問いをもち、さらに問いや思いが連続すると考えたからである。映像を見た後、子どもたちは「動きが合っている」「合わせるころやずれるところなど、表現運動と似ているところがある」「全員が連動している」などという気づきを発表した。この時間の最後には「どんなシンクロマットの作品をつくりたいか」という視点を与えてふりかえりを記入した。

- ・きれいなシンクロマットにしたい。・ダイナミックな作品にしたい。・いろいろな技を組み合わせたい。
- ・声をかけて、みんなが合うようにしたい。・きれいにシンクロしたり、ズレをつくったりしたい。

これらのふりかえりを参考にして、第2時では「シンクロマットの作品のイメージをつくろう」というめあてを設定し、作品のテーマを話し合い、実際に動きながら「はじめ」「なか」「おわり」のお話づくりに取り組んだ。具体的には、考えたお話や動きをもとに紙芝居にまとめる活動を行った。この紙芝居は、子どもたちが考えたお話をより具体的にマット上でどのように動き表現するのか、実際に動きをイメージするための一つの手立てとして取り組むよう促した。これらの活動後、この時間は「これからの自分やチームの課題について」という視点を与えてふりかえりを記入した。この時間のふりかえりは主に、技の合わせ方、技のレベルアップ、表現上の工夫についてのものであった。

#### 技の合わせ方

- ・みんなと合わせるのが難しかった。・動きがかなりバラバラなので合わせたい。
- ・今はかけ声で合わせているので、違う方法で合わせたい。

#### 技のレベルアップ

- ・できない技をできるようにしたい。・とび前転から水平バランスに切り替えるとき速くしたい。
- ・できる人ができない人に教えていくといい。

#### 表現上の工夫

- ・もっと動きを大きくしたい。・ダイナミックで、力強い動きを取り入れたい。
- ・動きを目立たせるために反対の動きを取り入れたい。

これらのふりかえりをもとにし、また第2時で作品の全体像があまり見えていない子どもたちの現状をとらえ、第3時は「場の使い方を工夫して、シンクロマットの作品のイメージをつくろう」というめあてを設定した。この時間には指導者から、右のような「場の使い方」を提案した(図1)。この提案をもとに、第2時ではあまり決まらなかった動きや構成面を試行錯誤しながら考える子どもたちの追求する姿が見られた。その結果、紙芝居

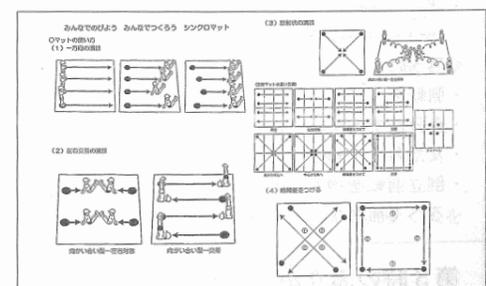


図1 場の使い方

への記入が多くなり、多くの子どもたちが作品の全体像をある程度把握できた(図2)。

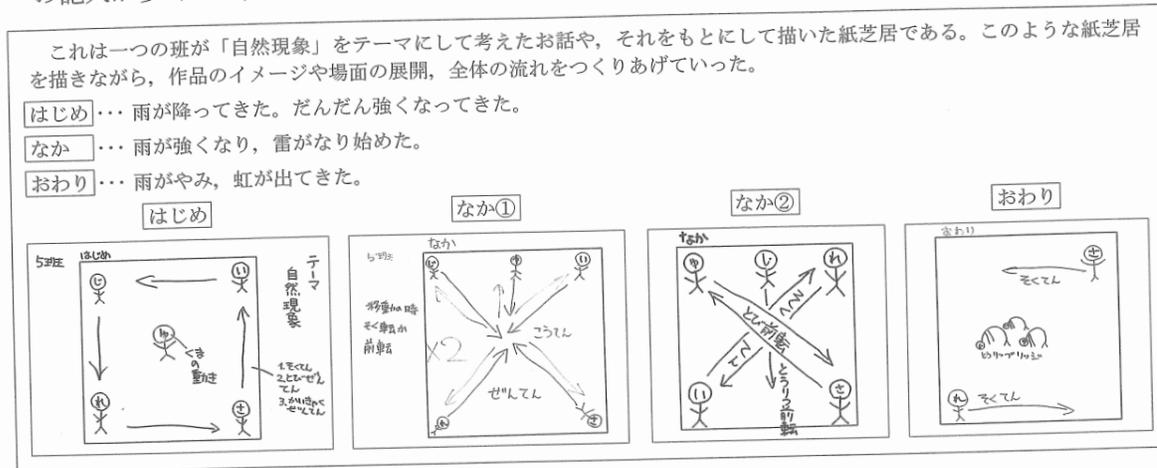


図2

そこで、この時間のふりかえりは「もっと工夫したいなと思うところ」という視点を与えた。この時間のふりかえりのほとんどが技のレベルアップについてのことだった。

- ・前転などの簡単な技だけでなく、倒立などもできるようにしたい。
- ・もっと難しい技にも挑戦していきたい。
- ・工夫したいところはY字バランスや、とぶ技などを取り入れて多くの技をしたい。
- ・動きが単調なので、側転などの華やかな技を取り入れたい。
- ・工夫したいのは、動きのきれいさときりっと切れのあるような技にしたい。

子どもたちの意識は技のレベルアップ、習得に向いていった。これこそ、シンクロマットのねらいの一つである、目的をもった技の学習、習得につながった。「場の使い方」を提案したことにより作品の全体像が大まかにとらえられるようになり、さらに作品を高めるためには「技のレベルアップが必要」という子どもたちの思いが進んだと考える。

### (2) シンクロマットの作品に必要な一つ一つの技を高める

第3時のふりかえりをもとに、第4、5時では、「コツを考えながら、シンクロマットに必要な技を高めよう」というめあてを設定し、技の習得をねらいとして取り組んだ。この時間の前半はチームを解体し、自分が取り組みたい技ごとに場を分け、お互いに見合ったり、補助し合ったりする学習を行った。そして、後半の約10分ではチームに戻って、二人で技のタイミングを合わせるペアシンクロに取り組んだ。その後、「今日の自分の伸びについて」というテーマを与え、ふりかえりを行った。第4、5時の子どもたちのふりかえりは次のようなものである。

#### <第4時>

- ・倒立前転をして、最初は補助ありだったけど、最後は補助なしでできるようになった。体の締めもできるようになってきた。
- ・何度かやっていると倒立が5秒くらいできるようになった。
- ・ぼくは側転を高めた。先生や友だちに教えてもらって上手になりました。
- ・一つ一つの技と向き合うことも大事なと思いました。

#### <第5時>

- ・側転を主にやって、手手足のリズムで、リズムカルにやるとうまくできた。
- ・自分ができない技の場所を見ていたら、コツを見つけることができた。(見学の子)
- ・友だちと合わせて、倒立ブリッジができるようになった。
- ・倒立前転を中心にやった。今日は足が上がるようになったし、補助ありで確実にできるようになった。班の考えだと、なるべく補助なしだからコツを見つけてがんばりたい。

第3時のふりかえりをもとに技を高めていくというめあてを設定したことにより、子どもたちの意識が一つ一つの技をレベルアップしようという意識の高まりにつながった。こういう作品にした

いという思いを実現する上で、技の習得を目指すことに必要感があったと考えられる。この2時間での技の伸びは顕著であった。

また、第3時までには作品の全体像がある程度見え、さらに第4時のところで技の伸びが感じられたところで、第5時の最初には、第1時に提案した採点基準をもとに、自分たちが目指すシンクロマットの作品とはどのようなものなのか話し合った。つまり、指導者から提案した採点基準と子どもたちが考える評価基準とのすり合わせを行った。そのすり合わせを行うことにより、より子どもたちが目指す作品像が明確化し、学級やチーム全体で作品像の共通理解が図れることと考えた。(子どもたちが考えたポイントは太枠の中)

	指導者が示した基準	ぼく・わたしたちの見るポイント・つくるポイント
全体の流れ	・演技と演技の流れはスムーズか。	○素早く動く(技と技の間を短く) ○止まらない(技と技の間) ○移動の時も演技する ○流れを途切れさせない
演技の工夫	・テーマが伝わる工夫があったか。 ・演技の組み合わせ方、場の構成、スピードや高さで工夫があるか。	○テーマが伝わるような技 ○動く方向がいろいろ ○反対の動き ・速い⇄ゆっくり ・左⇄右 ・みんなで動く⇄少人数で動く
一つ一つの運動の美しさ	・技ががていねいに行われているか。(補助つきOK)	○足がキュッとしまっている ○つま先まで伸ばす ○体をしめる ○技のキレ
フレンドシップ	・チームの仲間の息があっているか。 ・補助などの助け合いをしているか。	○技を合わせる場所とずらすところをつくる ○高さを合わせる ○着手のタイミング ○立つタイミング ○できるだけ補助しない ○声をおさえる

### (3) 全体の流れがスムーズになるように工夫する

第6時では「全体の流れがスムーズになるように、自分たちの表現を工夫しよう」というめあてで学習に取り組んだ。特に前時に話し合った「素早く動く」「止まらない」「移動の時も演技」などを意識できるようにしながら、通して演技をしたり、きょうだいチームで見合う時間を設定したりした。この時間は、めあてに沿って「自分たちのチームの流れはどうだったか」というふりかえりのテーマを設定した。

- ・(きょうだいチームの)4班がペアシンクロを入れていて工夫しているなと思いました。私たちももっと工夫したい。
- ・全体を通してやってみて、移動の時に普通に歩いたり走ったりしていたので、ジャンプをしたりして工夫したいです。
- ・技のつなぎで、前転をして工夫したいです。
- ・動きをみんな覚えることができて息も合っていたのでよかった。でも、テーマが伝わるようにもっと工夫したいです。

この時間のふりかえりは「もっと工夫したい」という言葉が多かった。そこで次時に、前単元の表現運動の学習や子どもたちが考えた評価基準とつなげて「反対の動き」を取り上げ、学習に取り組むことにした。

### (4) 自分たちが表現したいテーマが、より伝わるように工夫する

前時の子どもたちのふりかえりをもとに、この時間には「反対の動きを取り入れながら、技の組み合わせや動く方向などを考え、自分たちの表現を工夫しよう」というめあてで取り組んだ。まず初めに、シンクロマットの作品のなかに取り入れられそうな「反対の動き」について話し合いを行った。右のような意見が出され、これらを参考にして各チームで取り組んだ。各チームとも、意識的に反対の動きを取り入れたり、ズレをつくったりする姿が見

- T: 前に表現運動で「反対の動き」の学習をしたね。今回のシンクロマットで、自分たちの作品の中に取り入れられそうな「反対の動き」はどんなものがあるかな?
- C: 前転みたいに低い動きと倒立前転みたいに高い動きをする。
- C: 速いうごきをしておいてから、ゆっくりな動きをする。
- C: 大きい動きと小さい動きを、わざと同時にする。
- C: 動く方向なんだけど、わざと前に動く人と後ろに動く人を組み合わせる。
- C: 回り方や動き方は同じなんだけど、向かい合ったときに、鏡に映っているみたいに動いてみる。

られた。この時間は「発表会に向けて、さらに工夫したいところ」というテーマでふりかえりを行った。

- ・大きい動きと小さい動きを組み合わせるとテーマがよく伝わるようになった。ちがう工夫もしたい。
- ・高い、低い動きを入れてみると、動きに迫力が出てきた。もっと迫力を出したい。
- ・3班を見ると、アンテナの中で、高い、低いの差があって迫力を感じた。
- ・反対の動きを入れてみると、技が大きくなって見えることがよく分かった。

子どもたちのふりかえりから、「反対の動き」を取り入れたことで効果的な表現ができていることが分かった。「反対の動き」を取り上げ、想起できるようにしたことにより、子どもたちの動きは大きく変わり、よりテーマにつながる表現ができるようになった。

第8時では「これまでの学習を生かして発表会をしよう」というめあてで、発表会を行った。子どもたちは、第5時に話し合ったポイントをもとにお互いに評価をし合った。この時間は、単元全体を通してのふりかえりを記入した。

- ・今までシンクロマットをしてみて、最初はただ技を組み合わせるだけでした。だけど、「反対の動き」「スムーズに」「技の美しさ」など学んだことを取り入れていくとテーマがよく表現できました。自分たちで、どんどんつくったことがおもしろかったです。
- ・今までシンクロマットをしてきて、高校生がするようなバック転などの大きな技をしなくても、工夫次第で大きく見せられることが分かって、びっくりしました。一人一人がちがう方向に行ったり、ちがう動きをしたりすることで、テーマがよく表現できました。

このようなシンクロマットにあるおもしろさ、作品の構成面に目を向けたふりかえりが多く見られた。本単元全体を通して、シンクロマットの作品づくりという初めての経験の中で、子どもたちは試行錯誤を繰り返し、リズム変化の楽しさやつくり変えていく表現のおもしろさを感じながら何度も構成を練り直す姿が見られた。

また、次のようなふりかえりも見られた。

- ・最初は全く技もできなくてシンクロもしてなかったけど、やっついていくうちに、できる技も増えてきて、技の美しさも出てきて、シンクロもできるようになった。
- ・私はマットが苦手だから、友だちと合わせることも難しかったです。できない技をするときも困ったけど、毎日練習していたら、できるようになった技も増えたとし、最後はほとんどの技ができるようになったので、うれしかったです。

シンクロマットを通して、技の習得を感じた子どもたちも多かった。ただ単に「できる」「できない」ではなく、本単元では作品づくりを通して技の学習、習得をねらった。その結果、子どもたちは必要を感じ、子どもたちの技の習得につながったと考えられる。

## 5 おわりに

本単元において、一人一人が問いをもち追求する手立てとして、ゴールをイメージすること、そして各時間にふりかえりの視点をはっきりさせて書くことを大事にして取り組んだ。まずは、出合いの場において映像を通してイメージを膨らませ、そして時間はかかったものの自分たちの作品のイメージをチームで共有したことは、ゴールのイメージづくりにつながり、問いが連続するための効果があったと考える。また、ふりかえりの視点を与えたことにより、子どもたちの問いの高まりが見られた。ふりかえりの視点を与えたことにより、次時への方向付けが可能になり、「場の使い方」を提案したり、「反対の動き」を取り上げたり、評価のポイントを掘り下げたりするはたらきかけが有効にはたらいたと考える。しかし、本単元を通して、個の問いをどのように全体の問いにつなげ、全体での学び合いを構成していくのか課題として残った。その際に、どのようなはたらきかけをすると、より効果的なのか、今後考えていきたい。

(文責 小林 敏朗)